

# TRAIL-RUNNING FORUM 2016

## 報告2 PLATS / 午前部

午前中は代表理事の挨拶から石川弘樹、鏑木毅のスピーチと続き、そして3つの団体による討論会です。それぞれの概要を時間順に紹介いたします。

**挨拶 山西哲郎**（日本トレイルランナーズ協会 代表理事）

去年4月、この「日本トレイルランナーズ協会」を作りました。それまでは日本オリエンテーリング協会で「森を走ろう」というシンポジウムを開いていましたが、その中でもトレランが最も心配でありかつ期待が大きかったです。

今日はトレランを愛し楽しんでいる人たちに集まっていただき、トレランの意義や歴史を知ってもらうと同時に、これから自分たちは何をすべきか、ということを経験的な使命を持って考えて欲しいと思います。

**スピーチ1 石川弘樹**（日本トレイルランナーズ協会 副代表理事）

### 「日本のトレイルランニングの歩み」

かつては奈良時代の修験道や鎌倉時代の飛脚など、山を走る風習は古くから日本にありました。競技としての先駆けは富士登山駅伝（1913年～）や富士登山競走（1948年～）などです。しかしまだ「トレイルランニング」ではなく山岳競技です。国体でも山岳競技（縦走種目）が行われ（1980年～07年）、90年代には日本山岳耐久レース（93年～）や北丹沢山岳耐久レース（98年～）などが始まりました。

99年にアドベンチャーレースが国内に広まる一方、雑誌には「トレイルランニング」という言葉が登場し、04年からセミナーやツーリングなど遊びとしてのトレイルランニングが静かに盛り上がり始めます。08年に国内初の100kmレースが開催され、鏑木毅がUTMB（フランス）で入賞します。以後トレイルランニングのレースがTVで放送され、また選手がレースをプロデュースするようにもなりました。

10年からセミナーが全国に普及、大会開催による地域活性化も広がります。12年あたりから、レースやイベントがビジネス化し、また大会のボランティア活動を楽しむ人たちも増加してきました。国内初の世界規模の距離と運営の国際大会、UTMF（山梨・静岡）が開催されます。トレイル利用者とランナーとの間で問題が起き始めました。15年春に環境省の国立公園内利用の指針が発表され、そして日本トレイルランナーズ協会が発足します。この頃からプロアスリートも増えてきました。

## スピーチ2 鏑木毅（日本トレイルランナーズ協会 副代表理事）

### 「日本のトレイルランニングの現状と課題」

2005年にレース数は20大会、競技人口1万人。それが15年にはレース数300大会、競技人口20万人に増えました。急増の要因はなんでしょう？07年に東京マラソン開催によるランニングブームに加え、30、40代のアウトドア志向が理由ではないでしょうか、11年3月11日の東日本大震災によるメンタリティの変化が影響しているのかもしれませんが。

普及の一方、トレランを取り巻く環境も変化しています。13年に「鎌倉の事件」が起きます。市内のハイキング団体から鎌倉市に対して、ハイキングコースでのランニングを規制（禁止）し、それを条例化してほしいという陳情が出されたのです。15年には環境省や東京都が国立公園、自然公園利用のガイドラインを発表しました、文字面とはうらはらに解釈次第で厳しい規制にもなり得るものです。行政・環境団体・市民から一方的に言われるだけで、双方のコミュニケーションができていません。

これを解決するために日本トレイルランナーズ協会を結成しました。しかしこのスポーツの最大の魅力である「多様性と自由さ」を失わないために、協会ありき、ではなく民主的な組織が必要でしょう。また根強い偏見があるなか、地域振興（群馬県神流町では大きな経済効果）、環境活動（UTMF前後のクリーンアップ活動）、トレイル整備など、社会的なメリットをもたらすことが大切です。

## 公開討論会

### 日本トレイルランニングの目指す道（どうして組織が必要なのか）

パネリスト：鏑木毅、石川弘樹、杉本憲昭、宮地由文、松本大

司会：三浦務（日本トレイルランナーズ協会副代表理事）

#### ■ 三浦務

鏑木さんがスピーチしたような経緯で日本トレイルランナーズ協会が作られました。既に2団体が立ち上がっています。対立しているという見方もありますが、それぞれの意見を聞いてみなさんに考えていただきましょう。“キタタンの杉本さん”、“ハセツネの宮地さん”、プロスカイランナーの松本さんにご登場いただきます。

#### ■ 宮地由文（日本トレイルランニング会議理事長）

日本のスポーツ行政は国－文部科学省－スポーツ庁－日本体育協会－JOCという構造。その下に陸連や山岳協会など各種スポーツの中央競技団体があります。ここにトレイルランニングというスポーツをどう位置づけるか。単純に下から作れば良いというものではなく、日体協への加盟も必要です。

我々は国体の山岳縦走競技で培った経験を活かしたいのです。組織はトレイルランニングの権利と義務のためにあるべきです。山を走る権利を守り、ルール遵守や主催者モニタリングなどの義務を課します。公認指導者制度を作ることも重要です。競技そのものの専門性はトップ選手たちが作れますが、共通科目は日体協の指導者制度の中に入る必要があります。主催者連合的な運営団体ではなく、あくまでも競技団体を目指すのが我々の考えです。

#### ■ 杉本憲昭（日本トレイルランニング会議会長）

私の大会の出発点は36年前の丹沢登山競走。以来、トレイルの大会は18年前からの北丹沢耐久レースのほか、9大会を運営しています。参加選手は1万人以上、ボランティアは約2千人になります。大会は行政の理解協力がなければできないし、行政の要望を受け止めなければなりません。また、地元の観光協会や自治会・商工会の協力も必要です、地域のコンセンサスなくして大会はできません。

かつて日本の山は、里山で炭を焼いたり木材を切り出す中で整備されていました、しかし戦後は人の手が入らなくなり山は荒廃しています。私は丹沢で山小屋を運営していますが、自然は人の手を借りないと活性化できません。これからも多くの地域でトレイルの組織ができて、山が活性化すれば良いと考えています。

## ■ 松本大（日本スカイランニング協会代表）

スカイランニングとはスピード登山のこと。山を走るのではなく駆け登る、駆け下りるもので、登山がベースです。定義としては標高2000m以上の高山で行うものです。40か国が参加する国際組織ISFの日本支部が日本スカイランニング協会（JSA）。世界的にトレイルランニングは世界陸連が主管する動きになってきていますが、スカイランニングは国際山岳連盟が主管しています。しかしJSAは同じフィールドを使う競技として、日本トレイルランナーズ協会と共に歩んでゆくことを決定しています。

### 松本氏 組織を説明

日本スカイランニング協会が組織化した目的

- 1) 選手の安全：危険防止のため山岳における知識や経験が必要だから。
- 2) 国際大会への代表派遣。
- 3) 大会のコントロール：スカイランニング安易に広がらないため。

日本スカイランニング協会の目指すもの

- ・ 山間地の地域のスポーツにしたい。
- ・ 子どもからお年寄りまで広い年代に広めたい、夏場のスキーのように。
- ・ オリンピック種目に、一流のスポーツにしたい。

### 松本氏から質問：そもそも「トレイルランニング」の定義は？目指すものは？

石川：トレイルを走ればトレイルランニング。自然の中のオフロードであればビーチもトレイル。標高や山岳にこだわりません。スカイランニングとは役割分担をしつつルールや知識を共有していきたいと思います。

宮地：ロードランニングとトレイルランニングにはスポーツ医学的な違いがあります。ロードランニングはコンセントリック運動（筋肉を縮めて力を発揮する）ですが、それだけでなくエキセントリック運動（筋肉を伸ばしながら力を発揮する）も含むものがトレイルランニングです。

鏑木：レースコースの70%以上が未舗装路であればトレイルランニングレースでしょう。トレイルランニングが目指すものは、日本において健全なスポーツとして認知されること、メディアで「トレイルランニング」という用語が説明なしに使われるような状況になることを目指したいものです。

それぞれの組織に得意不得意があるのは当然で、行政との付き合いは宮地さんたちに1日の長があります。どこかの時点でひとつになる流れを作る必要があるでしょう。私が理事となったITRA（国際トレイルランニング協会）は世界陸連とユニットを組みましたが、陸上か山岳かというのは各国の事情によるだろう、と他の理事たちも話しています。

**杉本：**大同団結が基本。我々は30年間統一組織がなく、それぞれがそれぞれの地域の中で活動してきましたが、大きく飛躍する時代です。小異を捨てて大同につく。できるだけ早く日体協に加盟し、オリンピックも目指したい。3団体が一緒になればいい流れが生まれます。

### <会場からの質問>

トレイルランナーズ協会、トレラン会議、スカイランニング協会。この3つの団体は整合性がつくのでしょうか？ 私がトレランを始めた4年前に比べるとトレランに対する風当たりは非常に強くなりました。根っからのハイカーは敵意を持っています。今やるべきことはマナーと環境面の配慮です、前に並んでいる皆さんがその意思統一をできるのでしょうか？ もう一度確認したいのですが。

**楠木：**（意思統一を）作らなければいけない。環境省のガイドラインもこのスポーツの将来を決めていくものなので、行政に対応するためにがっちりと手を組まないといけません。

マナーに関しては「トレイルランニングをやるためにはこれを知らなければいけない」という統一ルールを作り、体系的に伝えることが大切でしょう。

**杉本：**山ヤの掟は「重装備」、トレイルランナーはパンツひとつの「軽装備」。その認識の違いはありますが、丹沢で見ているとトレイルの選手の方が山ヤよりちゃんとしている。行政にトレイルランナーを認めさせることが重要です、相模原市では偏見は減ってきて「トレイルの相模原」になってきています。そのように多くの人に共鳴してもらうことで雑音を消すことが大切です。

**松本：**トレランもスカイランニングもフィールドは同じ。サッカーとラグビーの関係に似ています。同じ競技場の利用ルールを一緒に作りたいものです。

午後の部に続く